高取の考古学Ⅴ

速報―高取の発掘調査最前線2022

佐田タカヤマ遺跡（上空西から）

清水谷遺跡（上空から）

令和４年３月

高取町教育委員会

目　　次

はじめに……2
1．佐田タカヤマ遺跡……3 ～ 6
2．清水谷遺跡……7 ～10
3．越智遺跡……11 ～ 13

タカヤマ遺跡　木棺掘削

タカヤマ遺跡　実測

清水谷遺跡　石組池検出

清水谷遺跡　大壁建物掘削

はじめに

高取町教育委員会は、令和2年度～3年度に実施した発掘調査や試掘調査の中で、佐田タカヤマ遺跡・清水谷遺跡・越智遺跡（元興寺文化財研究所委託）等、3箇所の調査を速報で紹介します。

報道等で大きく取り上げられたものの、コロナ過のなか、現地説明会が行えなかった反省を踏まえ、高取の考古学Ⅴというかたちで速報展を企画しました。ご観覧頂き、今後の高取町文化財行政へご理解・ご協力をいただきたいと思います。

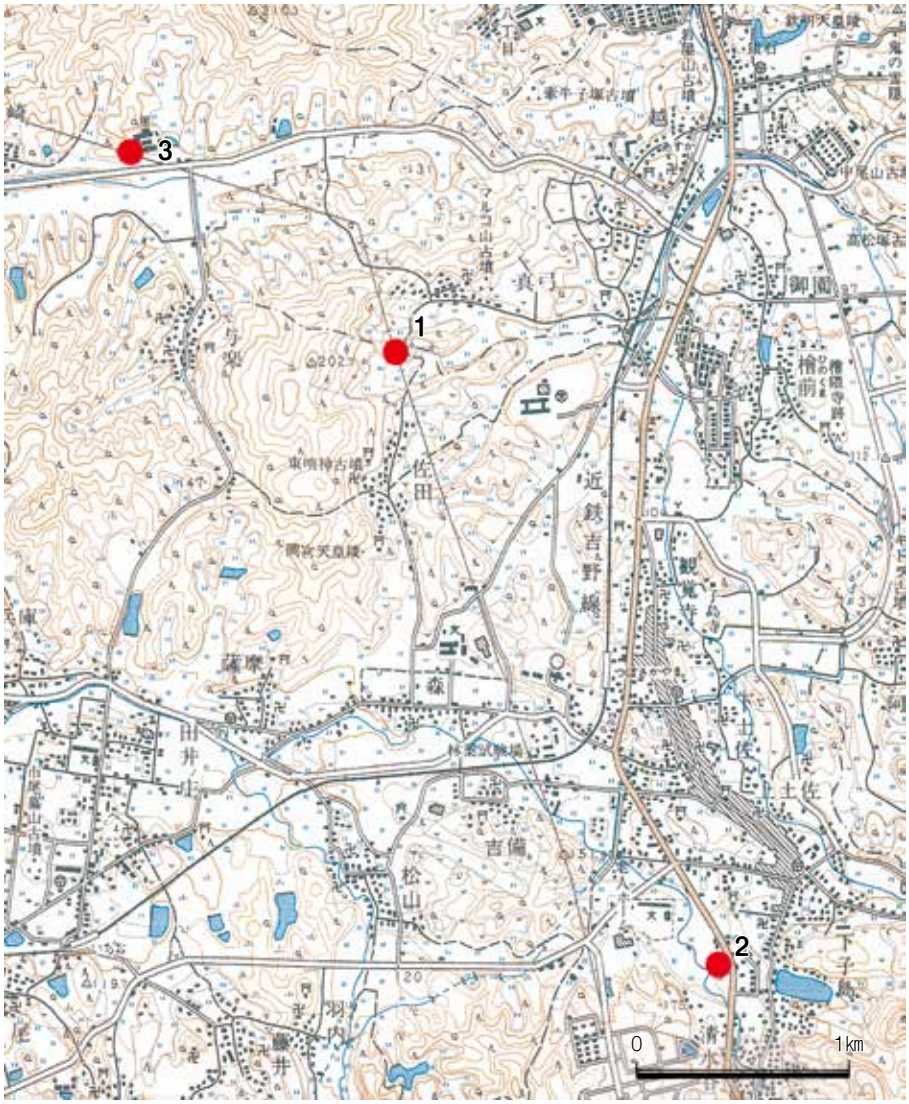


図１　高取の考古学Ⅴ掲載調査地位置図

１．佐田タカヤマ遺跡　２．清水谷遺跡　３．越智遺跡

1．佐田タカヤマ遺跡

【はじめに】

佐田タカヤマ遺跡は高市郡高取町佐田字タカヤマ594番地に位置します。令和元年度の試掘調査で、土壙・柱穴・木棺直葬墓等を検出し、奈良県遺跡地図第３分冊17－Ａ0846番に指定されました。この結果をうけて民間開発に伴う本調査を、令和２年７月28日～12月28日の期間で高取町教育委員会が実施し、大型土壙・大壁建物・掘立柱建物・古墳・土壙墓・木棺直葬墓・区画溝・柱穴を検出しました。調査面積は約450㎡です。

烽火台（上空から）

烽火台（南から）

焚口（上から）

【調査の概要】

1トレンチでは、直径12mを測る地山を削り出した円形の高まりの中央上面で直径約2m、深さ約2.7mの擂鉢状の穴を穿った土壙が検出されました。この土壙の南側に幅0.4m長さ3mの細長い通路が取り付きます。土壙、通路内には炭小片や灰が混じった砂質土が堆積し、土壙内に人頭大の花崗岩一石が放置され、周囲の壁面は黒く煤けていました。土壙上や側面には直径約0.3mを測る円形の柱穴を多く検出されました。土壙上面の遺物包含層から土製の土玉が出土しています。

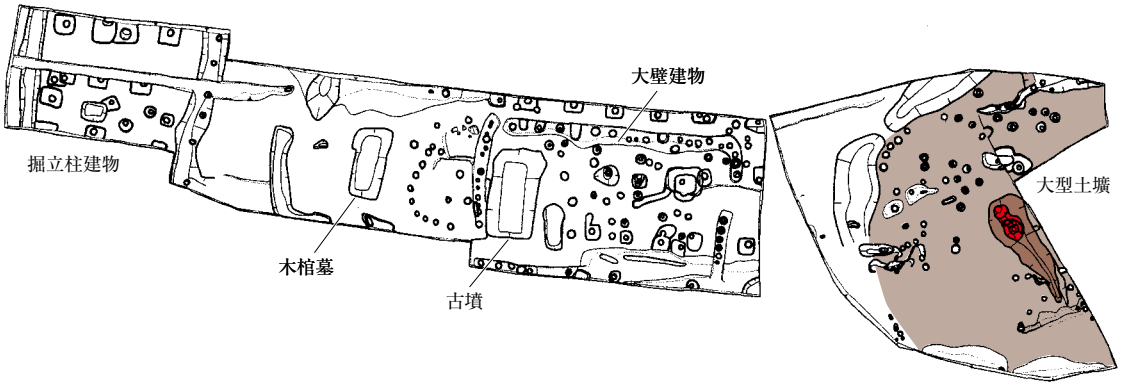


図2　佐田タカヤマ遺跡遺構平面図

2トレンチでは、東西10.5m、南北6mを測る大壁建物が検出されました。大壁建物は幅0.5mの溝状の掘込み内に直径0.2～0.3mの柱を連続して打ち込み、その柱を埋め込んで壁面を構築する建物と考えられています。大壁建物の南東部分約5mは、他の遺構と重複し削平されていました。大壁建物東側では壁溝が約1m途切れた部分があり、建物の出入り口になると考えられています。大壁建物の北側と東側に長辺1.1m以上、短辺0.5m以上を測る方形掘形に0.2mを測る柱穴の痕跡が9ヶ所検出されました。また、大壁建物が構築される以前にあったと思われる古墳や木棺直葬墓等が検出されました。古墳は大壁建物で削平されていますが、墳丘の痕跡から直径約10mを測る円墳と考えらます。墳丘の中央部に南北3.5m東西1.8mを測る墓壙を検出しました。墓壙内の木棺の痕跡から棺に使用されたと考えられる鉄釘15本が出土しています。墓壙の東南側に南北1.5m東西0.6mを測る土壙を検出しました。土壙は古墳の第2埋葬施設の土壙墓と思われます。

古墳の西側の一段下がった地点に南北に細長い平坦地があり、その中央で南北2.8m東西1.3mを測る墓壙を検出しました。墓壙内の木棺の痕跡から鉄釘26本と須恵器杯3点が出土しました。

大壁建物（東北から）

大壁建物掘削状況（西から）

古墳埋葬施設

木棺墓

3トレンチでは、東西に幅1m、長さ5m以上を測る区画溝を検出しました。区画溝の断面形態は箱形で底面は平坦になっています。区画溝間では、方形掘形をもつ掘立柱建物の柱穴が4ヶ所検出されました。検出した柱穴は約東西1m、南北1.2mを測る方形の掘形で柱痕跡は直径0.3～0.4mを測ります。トレンチの南北は既に削平されていて不明ですが、東西幅3mの細長い平坦面に東西1間、南北1間以上の建物が存在した可能性が高いと考えられます。

掘立柱建物跡（西から）

【遺物の出土状況】

出土した遺物は、遺物収集箱（コンテナ)約1/3箱と鉄器ケース5箱で、土器のほとんどが古代の時期と考えられる土師器の細片です。鉄器ケースは2トレンチの古墳から出土した鉄釘と木棺墓から出土した鉄釘で、木棺墓から出土した須恵器杯は飛鳥Ⅰ式の時期と考えられることから木棺墓の埋葬時期は7世紀前半頃と考えられます。

須恵器出土状況

鉄釘出土状況

【まとめ】

調査で検出した１トレンチの大型土壙は、地山を擂鉢状に掘削し、土壙内に枯れ草等を詰めて火を焚き、燻べらせ、上面の煙突状の煙道から煙を排出させた烽火の遺構と考えられます。２トレンチの大壁建物は、東西に細長い丘陵上に、古墳や木棺墓の墳丘を削平したのちに大壁建物を構築されていました。高取町内での大壁建物跡は、清水谷遺跡・観覚寺遺跡等の10遺跡で部分的な検出例も含め約60棟を検出していますが、大半は平地部であり丘陵上に検出されるのは、森カシ谷遺跡検出例だけです。大壁建物に接して東側と北側から検出された掘立柱建物の柱穴群は大壁建物を囲む柵の可能性があります。３トレンチで検出した掘立柱建物は、両端に区画溝を有し、規模不明ながらも一辺が１ｍを超える方形の掘形が検出している事から、大型の掘立柱建物が想定されます。

遺構は検討の結果、大型土壙は烽台、大壁建物は烽を可動させる人の屯舎か燻る材料を備蓄する倉庫、掘立柱建物は烽を管理する役人の詰め所と理解できます。これらの遺構からの出土遺物はありませんでしたが、検出状況からそれぞれの遺構は同時期と判断しました。

下層の古墳や木棺墓が７世紀前半までに削平されている事から７世紀後半以降と考えられます。佐田タカヤマ遺跡は見通しの良い小高い丘陵上の標高152.5mで、丘陵下と約30mの比高差のある小高い丘の上にあります。

検出された古代の烽火に関しては『日本書紀』天智天皇６年（667）に築造された「高安城」、『続日本紀』元明天皇５年「高安烽」等が文献で見られますが、天智天皇２年（663）の白村江の敗戦で、危機感を持った日本国が、天智天皇３年（664）に飛鳥防御のために造った防衛通信網の一つである可能性があるります。日本国内でこのような古代烽の遺構は例が無く、今回の検出は大変貴重です。

2.清水谷遺跡

【はじめに】

清水谷遺跡は高取町清水谷に所在し、平成13年度(2001)の第１次調査で５世紀後半のオンドルを伴う大壁建物が検出され、韓式系土器等が出土しました。今回の第２・３次調査地は１次調査地の北側に位置する清水谷323番地で、工場増設に伴う受託事業として令和３年５月10日～７月30日(第２次)、国庫・県費補助の範囲確認調査として10月４日～11月29日（第３次）の期間、高取町教育委員会が現地調査を実施しました。その結果、古墳時代中期の石組方形池、中期末の大壁建物、中世の土坑・柱穴・素掘溝等を検出し、須恵器・土師器（韓式系土器含む）・瓦質土器・土師皿、そろばん玉形紡錘車・刀形木製品・馬歯等が出土しました。調査面積は２次調査が620㎡、３次調査が416㎡、合計1,036㎡です。

清水谷遺跡（上空北西から）

【検出した主な遺構と出土遺物】

石組方形池

一辺0.3～0.5mを測る川原石を傾斜面に５～６段で階段状に積んだ石組が東西・南北４方向で検出され（一部含む）、直角に曲がる石組の角部分も３ヶ所確認しました。この石組は池の護岸と考えられ、護岸された池は、東西26m、南北13mの規模で長方形を呈していたと考えられます。池の深さは現状約0.5mで、粘質土や砂層が堆積していました。床面に石が敷かれ痕跡は確認されていません。護岸の基底には比較的大きな石を使い、石の目地は通っています。西側の護岸から幅約0.9mを測る石を詰めた暗渠が約4.6mにわたって西南方向に続いておりトレンチの外側に達しています。この暗渠は検出状況から、池の上澄み水を排水する排水溝と考えられ、池で溜まった水を西側の一段低くなった場所に流していたと思われます。このことから西側には水に関係する何らかの施設があったと推察されます。石組池の護岸を観察すると、南側の残存状況は北側より悪く、池の廃絶時に、池の南側から北側へ埋め戻しが行われたのでしょう。

池北護岸（西から）

池南護岸（西から）

大壁建物と池南護岸（東から）

池護岸北東角（南から）

池須恵器出土状況

池木製品出土状況

池の堆積土は約１割程度しか発掘されていませんが、護岸や試掘された池の内部から古墳時代（５世紀中頃～）の土器片（須恵器・土師器）等が遺物収集箱（コンテナ）約50箱が出土しました。

須恵器には杯・高杯・壺・甕等が、土師器には杯・高杯・壺・甕・甑・深鉢形土器・製塩土器等があります。甑や深鉢形土器は韓式系土器に含まれます。また瓦質土器の短頸壺、池の護岸から紡錘車形土製品・池の北東角から刀形木製品、池や護岸周辺から馬歯が出土しています。

大壁建物

石組方形池護岸の内側にあたる部分に位置し東西11.8m、南北10.8mの方形を呈する大壁建物１は、方形池が廃絶して埋め戻されてから建物が建てられたと考えられます。

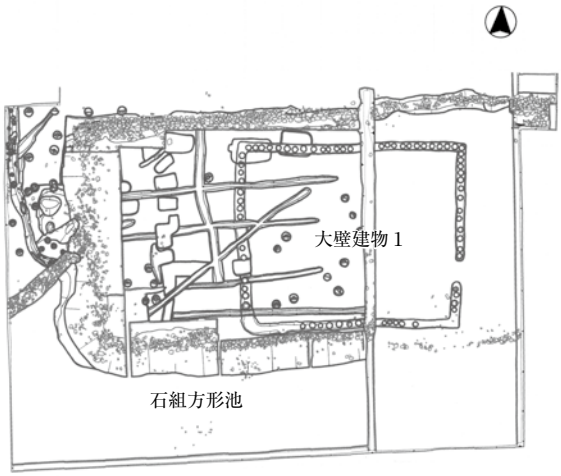
幅0.4～0.6mの壁溝内に直径0.2～0.3mを測る柱穴の痕跡を確認しました。東側の壁溝に出入口と思われる壁溝が途切れた部分があります。壁溝内の柱穴から５世紀末頃の須恵器破片等が出土しています。

方形池から１段高い位置にする第１トレンチでは、東西10m、南北11m以上の大壁建物（２）が検出されています。この大壁建物２も建物の規模は大壁建物１とほぼ同じですが、出入口部が南側と考えられ、大壁建物１を右側へ90度転回した形態になります。資料になる出土遺物はなく建物の時期は不明ですが、おそらく大壁建物１と同時期と考えられます。

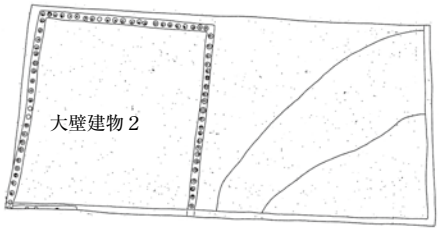
大壁建物１（北東から）

大壁建物２（北東から）

大壁建物２壁溝掘削況



第２トレンチ



第１トレンチ

0　10m

図３　清水谷遺跡平面図

【まとめ】

石組池を埋め戻して整地した所に大壁建物１が構築されています。大壁建物１は約12m×11mで、これまで高取町で検出された大壁建物としては最大クラスです。

石組池の護岸や池の数ヶ所から焼土や炭片が確認され、焦げた土器や刀形木製品も出土しています。また馬歯等や紡錘車形土製品も出土しており、池で何らかの祭祀行為があったと考えられます。大字名の清水谷は、高取山からのきれいな伏流水が出て、吹き出ていたことが、小字名の「ナルミ」から想定できます。湧き出た水を池に溜めていたのか、池そのものが、湧水地だったかも知れません。

池の用途については、御所市の南郷大東遺跡、東大阪市の西ノ辻遺跡のような、水に関する祭祀を行った池とも考えられます。大阪府立狭山池博物館長の小山田宏一氏からは灌灌用とすると石を貼るなど立派すぎるし溜池としては池の深さが浅過ぎるのではないかと指摘を頂いています。また奈良文化財研究所長の本中　真氏からは南北で護岸の形態が異なり、池内から種子や植生が在ったというデータが見られない等の理由から王権が関わった苑池というのは考えにくいと指摘されています。

いずれにせよ５世紀中頃に造られた最古級の石組方形池で、清水谷に来た渡来人が池を造った事には間違いがないと考えられます。

『日本書紀』応神天皇７年に「高麗人・百済人・任那人・新羅人が来朝し、池を造り韓人池と云う」という記載があります。

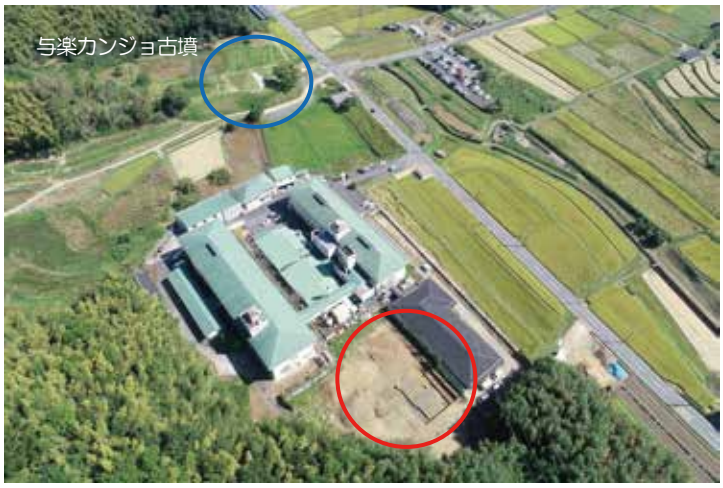
清水谷遺跡例がこの韓人池に当たるかどうかはまだ不明ですが、記載に見られるような渡来人が造ったと思われる人工池を確認できた調査成果を得られました。

3．越智遺跡

【はじめに】

越智遺跡は、高取町と橿原市の境に位置する貝吹山を最高所とする丘陵南側の東西に延びており、奈良県遺跡地図17A－580の遺物散布地です。民間開発に伴って遺跡に影響が想定される範囲において、奈良県および高取町教育委員会の指導のもと、公益財団法人元興寺文化財研究所が発掘調査を実施しました。調査期間は令和３年８月25日～10月15日の間、調査面積は584㎡です。

今回の調査区は、越智遺跡が位置する丘陵のふもと標高90mの地点で、200m東に位置する与楽カンジョ古墳など周辺には多くの古墳がみられます。また、１㎞西には越智氏の居館とされるオヤシキ地区、500m東にはオギタ地区などで中世の遺構・遺物も見つかっていました。



調査区周辺（赤枠の範囲）

【調査成果】

今回の発掘調査では、１区と２区の２つの調査区を設定しました（図４）。

１区の調査では、古代～中世の落ち込み、井戸、土坑、ピットが確認されました。

落ち込み１（ＳＤ１）は、１区西側で南北方向に延びる西肩部を確認しており、その幅は15m以上を測り、埋土が大きく３つに分層できます。上層は瓦器碗・土師器皿など中世の遺物が出土し、耕作土もしくは造成土の可能性があり、この層に伴う遺構は井戸（ＳＥ３）、土坑、ピットがあります。中層は古代～中世の遺物がみられ、水の影響も窺えますが比較的乾燥した土層であったと考えられます。下層は常に水がよどんでいた状況であったと思われ、奈良時代の遺物が多く出土します。土器には土師器の椀・皿・甕などが中心ですが、須恵器の杯・皿があり、「越」「器」などの字が書かれた墨書土器、

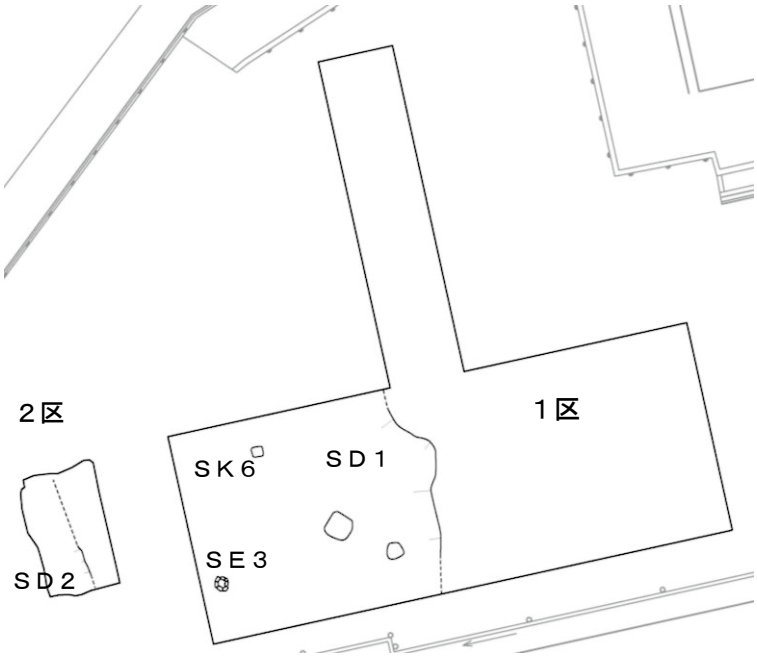


図４　越智遺跡調査区平面図（1/500）

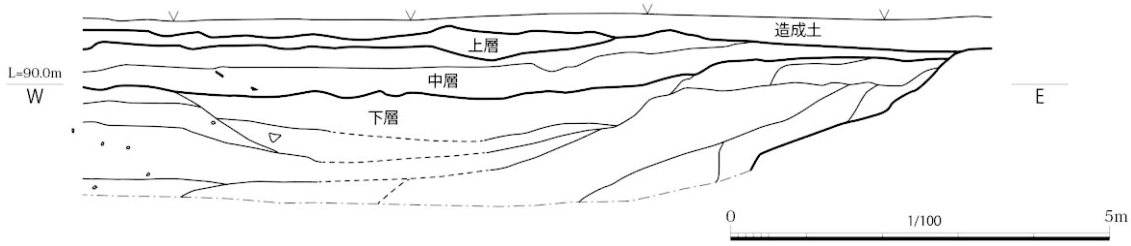


図５　１区ＳＤ１北壁土層図（S ＝ 1/100）

製塩土器が出土しています。木製品には、付け木などと呼ばれる端が焼けた木の切れ端が100点ほど見つかっております。なお、今回の開発が深さ２m以上には及ばないため、この落ち込みの深さは底が出ていないため分かりません。また下層についても、一部の範囲の掘削にとどめております。

井戸（ＳＥ３）は、１区の南西側で確認した石組みで作られたもので、落ち込み（ＳＤ１）上層と同時期以前に埋まったものと考えられます。石組は円形に組まれ、内径は60～70㎝、深さは1.7m以上です。掘方及び石組内の埋土から、瓦器碗・土師皿が出土しており、概ね12世紀のものと考えられます。

土坑（ＳＫ６）は、１区の北東側で確認した方形の掘り込みに曲物が据えられたもので、落ち込み（ＳＤ１）下層上面より掘り込まれています。0.8m×1.0mの方形の掘方に、径65㎝、高さ30㎝の曲物が据えられている。掘方及び曲物内の埋土より奈良時代を中心とした古代の土器が出土しています。

落ち込み１（SD１）検出状況

落ち込み１（SD１）堆積状況

２区の調査では、南北方向へ延びる落ち込み２（ＳＤ２）の東肩部を確認しており、その幅は５m以上である。開発深度の関係で底まで掘削できていないため、深さは２m以上を越えます。埋土は、上層が耕作土か造成土、下層が水のよどんでいた状況で、中～近世の陶磁器が出土しております。

【まとめ】

今回の調査により、越智遺跡はこれまで指摘されていた中世だけでなく、奈良時代に遡る土地利用があったことが明らかとなりました。奈良時代の墨書土器に書かれた「越」の字からは、『日本書紀』や『万葉集』には、「越智」「越智野」という地名が記載されていたことを裏付ける可能性があります。墨書土器と合わせて製塩土器や付け木などは平城京域や官衙で多く出土することから、本遺跡が通常の集落とは異なる性格をもっていた可能性が考えられます。

図６　奈良時代の墨書土器に描かれた字

井戸（ＳＥ３）検出状況

土坑（ＳＫ６）内曲物検出状況

石組池北護岸